

午前10時。

遮光カーテンの隙間から差し込む容赦ない光が、万年床の端を鋭く照らしている。

夏海は、脂の浮いた顔を枕に押しつけたまま、一度だけ深い溜息をついた。

肺の中の澱んだ空気をすべて吐き出すような、重い溜息だ。

「……ん、んん……」

75キロの肉体を起こすのは、ちょっとした重労働だ。

よっころしょ、と声に出さなければ、重力に逆らうことすらままならない。

ミシミシとベッドの軋む音は、そのまま夏海の膝と腰の悲鳴に重なる。

身長は155センチ。若いころは「小柄で可愛い」と言われたが、42歳となった今では単なる「横に広いデブなおばさん」であることを、夏海は哲学者のように自覚している。

のろのろと這い出し、まずはトイレへ向かった。

それから洗面台に行き、ぬるま湯だけで顔を洗う。

洗顔料を使わないのは、肌のバリア機能を守ると、いつか見た美容系の動画で語られていたからだ。

鏡を覗くと、水に濡れた色白の丸い顔が視界に入った。

皺もシミも、同年代に比べれば少ないと思う。

まだ三十代で通るのではないか……。

ふとそんな希望が頭をもたげるが、すぐに打ち消した。

若く見えたところで、今の生活に何の意味もない。

夏海は結婚にも恋愛にも、とうの昔に興味を失っている。

たとえ奇跡的な美貌を持っていたとしても、この四畳半のアパートでは宝の持ち腐れでしかないのだ。

冷蔵庫から6枚切りの食パンを取り出し、トースターに放り込む。

待っている間に、使い古されたアニメキャラのマグカップにカフェラテベースを注ぎ、牛乳を加えた。

こんなんだが「カフェ風モーニング」の完成だ。

こんがり焼けた食パンにはたっぷりのバターや苺ジャムを塗りたい所だが、夏海は何も付けずに食べるようにしている。

健康診断では、毎年痩せるように指摘されてしまう。

カロリーを削る為に夏海が心理的な抵抗をほとんど感じずに実践出来ることは、パンに何も付けないことくらいしかない。

5分ほどで朝食を食べ終わると、戦場であるパソコンデスクへ向かう。

夏海は在宅のシナリオライターだ。

主に動画配信サイトの漫画動画や雑学動画のシナリオを書いている。

派遣で勤めていた会社を辞めてフリーランスになり、今年で5年目。

常に収入はギリギリで、住民税や年金の支払いはいつも督促状が来てから支払うような生活をしている。

それでも、そんな綱渡りの状態で生き延びてきたのだから、フリーランスとして勝ち組だと夏海は自画自賛している。

5年という月日の中で、景色は目まぐるしく変わった。

大手に次々と採用されて有頂天になったこともあれば、仕事がゼロになった時期もある。

……『天才』をライバルだと思って勝手に張り合い、敗北して絶望したことも。

今の夏海は、お世辞にも「良い調子」とは言えない。

ろくに休まずに1日中執筆しても、月収は18万。

そこから4万5千円の家賃を払い、年金や国民健康保険、住民税を払うと、手元には5万円ほどしか残らない。

もう少し余裕が欲しいと、ついため息をついてしまふ日々だ。

仕事をしようとデスクの前に座り、椅子を深く引くと、夏海の腹肉が「むにり」と太ももの上に乗った。

(……え?)

タイピングしようとした指が止まる。

一ヶ月前、この肉はもっと控えめに、触れるか触れないかの距離にいたはずだった。

それが今は、確かな質量と熱を持って太ももに密着しているのを感じる。

(……また、太った?)

ここしばらく体重計に乗っていない。

今から測ろうかと思ったが、絶望的な数字を目の当たりにするのが怖い。

……明日、測ることにした。

(今日は食事を控えなきゃね)

パソコンが立ち上がると、チャットワークとデイスコードを順に開いていく。

両方ともクライアントからの連絡ツールとして使っている。

まずは【AI漫画動画チャンネル】のデイスコードを開いた。

新作のプロットが届いていた。

ここは文字単価0.8円という低賃金だが、細かいプロットが用意されているため、何も考えずに手を動かせるのが利点だ。

一本3千円で、週に3本書く契約になっている。

2時間あれば1本書くことが出来るので、なかなか美味しい仕事だ。

届いたプロットを流し読みする。

……それはお粗末という言葉すら生ぬるいくらい、程度の低いラブコメだった。おそらくAIが生成したのだろう。

これならまだ人気動画のパクリの方がマシだと本気で思う。

案の定、チャンネルの再生数は死に体で、そろそろ打ち切りになると思う。

……それまでは稼がせてもらいましょう、と夏海は呟いた。

次にチャットワークを開くと、【スカッと系恋愛漫画】からフィードバックが届いていた。このディレクターは「日向」という男なのだが、とにかく言葉がキツイ。画面越しでも、彼の冷ややかな視線が突き刺さるようだ。

『展開が退屈です。』

今のトレンドわかってます？

メイド喫茶でデートする下りは丸々カットで。

明日までに新しいプロットを再提出してください』

このチャンネルでは週1でボイスミーティングがあるのだが、その際に日向は「自分がいた某大手チャンネルでは……」と過去の栄光を匂わせる。

しかし具体的にどのチャンネルにいたかは、「守秘義務だから」と決して明かさない。

夏海も大手と契約していたが、ほとんどが実績公開可能だったので、日向の言うことは嘘だと思っている。

大した事ないくせに、いつも上から目線。

バカにしたように修正を命じられるたびに、「もう辞めます！」という言葉が出そうになる。

しかし、ここは1本5千円で週3本の契約だ。

月6万円という安定を手放す勇気は、今の夏海にはない。

夏海はぎゅつと奥歯を噛み締めるが、「承知いたしました！今日中に修正します！」と従順なライターを演じる返信を送る。

連絡が来ていたのは2箇所だけだが、夏海は他に3件のクライアントを持っている。

【健康雑学チャンネル】は夏海にとって安全牌だ。

動画配信サイトで良くある、枝豆の妖精に喋らせているチャンネルである。

このディレクターは驚くほど腰が低く、「夏海さんのシナリオは最高です！」「今回も完璧すぎて震えました！」と、過剰なまでの絶賛をくれる。

初めのうちはいちいち喜んでいたが、違和感あるくらい褒めちぎるので、最近では「こういうマニユアルなんだろうな」と思うようになった。

しかし、やはり賞賛されるのは悪くない。

一本の報酬は4千円。調べものが多くて時間は食うが、今後も依頼を引き受けていくつ

もりだ。

もっとも気に入っているクライアントは【底辺ライフ系漫画動画】だ。

『手取り13万・楽を選んだフリーターの末路』『リボ払いで借金地獄に落ちた派遣OL』などをテーマに書く。

自分より低収入で不幸な主人公の悲惨な結末を書いていると、暗い充足感が胸を満たし、「自分はまだマシ」と安心できる。

ここは1本6千円と高単価だが、抱えているライターが多くて夏海には週1本しか発注がこない。

もっと書きたいと思う気持ちが強いのだが、過去に熱意を出してクライアントに逃げられたことがあるので、言わないようにしている。

そして最近、仕事を広げるために始めたのが、エッチな音声作品のシナリオだ。

駆け出しなので単価は1文字1円だが、ある程度実績が出来れば3円くらいの報酬になるそうだ。

成人向けシナリオは避けて通ってきた分野だが、生活の為に止む無しという気持ちで取

り組んでいる。

今の文字単価は平均1円。

月収18万を維持するには、一日に最低でも7千字は書く必要がある。

一本3千字から5千字のシナリオを毎日2本書くのが夏海のノルマだ。

依頼の来ている案件をすべて書き出し、今日のタスクを考える。

今日はAI漫画動画シナリオ、健康雑学シナリオ、そして日向へのプロット修正をやることにした。

「よしっ！やるぞ！」

自分を奮い立たせるように短く声を出し、夏海の指がキーボードの上で踊り始めた。

まずは【AI漫画動画】からだ。

どんなに中身のない仕事だと毒づいても、書き始めれば夏海は「プロ」になる。

モニターを凝視し、全身全霊を込めてセリフを紡ぐ。

独身男性が喜びそうな甘ったるいセリフを捻り出し、「これはグッとくるわ……」と一人でニヤつきながら、キーボードを叩き続ける。

それほど低単価でも、それほど使い捨てのコンテンツでも、生み出した言葉は自分の身だ。

手を抜くことは、自分自身を否定することと同じ。

そのプライドだけは手放したくないと思っている。

机の上のスナック菓子をつまみながら作業する。

一本書き終え、時計を見ると午後1時を少し過ぎた所だった。

朝が遅かったのでまだ大して空腹ではないが、キリが良いので昼食の準備を始める。

脳を酷使するシナリオライターにとって、エネルギー補給を断つことは死活問題。

なので夏海は空腹になり過ぎないようにうちに食事をするようにしている。

買い置きのカレーヌードルに熱湯を注ぐ。

冷蔵庫にはトマトの残りがあつたはずだが、まな板を出すのがどうしようもなく面倒で、ヌードルだけを机に運んだ。

カレースープに浮いている貧相な乾燥野菜を見つめながら、夏海は麺をすする。

(……私の書くおバカな主人公なら、『カレーヌードルは野菜たっぷりだからヘルシーだね!』なんて言いそう)

瞬時に頭の中でそんな漫画動画が出来上がり、再生され、夏海は思わず笑ってしまう。

(私はそこまで馬鹿じゃないからね……)

顔にラーメンの汁を跳ねさせながら、夏海は考える。

今日の夜は野菜炒めを作ろう。たっぷりの野菜と鶏むね肉を使って薄味に仕上げる。米は食わず、冷ややつこに。

そうすれば、今日のお菓子もラーメンも帳消しだ。

食事が終わると、甘いモノが欲しくなった。

夏海は吸い寄せられるように棚へ手を伸ばし、チョコパイを引っ張り出す。濃厚な甘さを体に流し込むと、強烈な眠気が津波のように襲ってきた。

2年前ほど前からだろうか、昼食後に抗いようのない眠気がくるようになったのは。そんな時、夏海は我慢しない。

締め切りさえ守れば、好きな時に寝られるのがフリーランスの特権なのだ。

夏海は万年床に潜り込み、重い瞼を閉じた。

再び意識が浮上したのは、午後3時を過ぎていた。

寝起きの口寂しさをチョコビスケットで紛らわせ、【健康雑学チャンネル】の執筆に取り

掛かる。

枝豆の妖精のセリフを回すのは慣れたものだ。

しかし、この手の雑学は適当なことを書くとな上するので注意が必要だ。
ネットで裏取りをしながら、4千字のテキストを完成させていく。

完成させる頃には7時を過ぎていた。

1日中シナリオを書いていると、脳味噌がスカスカの搾りかすになったような気分になる。

シナリオライターを始めてから、一日の記憶が極端に薄くなった。

自分の時間が、1文字1円のシナリオに吸い取られているような気がすると思う。

（そうだ、買い物かなきゃ。夜は野菜を食べるのよ）

夏海は思い出したように立ち上がり、着古した部屋着の上にコートを羽織ると、夜のスーパーへと向かった。

（野菜炒めと冷ややっこよ。それ以外、口にしてはダメ）

買う物は決まっている。

もやし、キャベツ、鶏むね、豆腐、その4点だけをカゴに入れる。

野菜売り場へ真っ直ぐ向かうとした夏海だったが、入り口付近の惣菜コーナーから漂う香ばしい匂いに、視線が吸い寄せられた。

昨今の物価高でスーパーの弁当も600円ぐらいするようになった。

低収入の自分には分不相応な贅沢品だ……と通り過ぎようとした、その時だった。

視界の端に、目が眩むような光景が飛び込んできた。

『半額』

この時間帯から半額シールが貼られるのは珍しいことだった。

しかも「から揚げ弁当」に。

躊躇する暇などなかった。

気づいた時には、弁当はすでにカゴの中に鎮座していた。

（半額なんて滅多にないんだから。これは事件なの）

自分への言い訳を高速で組み立て、それ以外の物は何も買わず、夏海はレジへと向かつ

た。

帰宅し、すぐから揚げ弁当を頬張る。

ジュシーで美味しかった。

この満足感がわずか300円で手に入った。

定価で買えば自己嫌悪に陥るところだが、半額なのだから、「幸福の果実」と呼んでも差し支えないだろう。

食後に温かいカフェオレを淹れた。

仕事も終わり、寝るまでの時間、スマホを眺める至福の時を過ごす。

SNSをダラダラと見ていると、広告の中に、見覚えのあるタイトルを見つけて目が止まった。

それは夏海が高校生の頃に心酔した警察官が主人公のミステリーゲームの新作だった。

かつての主人公とヒロインが結婚し、その子供が活躍するという設定のようだ。

夏海は微笑ましい気持ちになりながら、公式サイトの特レイラーを開いた。

初代テーマをアレンジしたBGM、スタイリッシュな演出、内容も面白そうだ。

……定価だと高価だろうから、セールになったら絶対に買おう。

そう胸を躍らせた直後、トレイラーの最後に映し出された文字が、夏海を不意打ちする。

『シナリオ 真藤エミリ』

その名前は画面の中で誇らしげに、残酷なほど美しく、フェードアウトしていった。

まさか、あの人が、こんな場所にまで昇り詰めていたなんて。

大手ゲーム会社の、看板とも言える人気シリーズ。

そのメインシナリオ。

自分には夢を見ることがさえ許されないような憧れの舞台に、かつてライバルだったエミリが、立っている。

暫くの間、夏海は思考も肉体も停止した。

毎日、必死に動画サイト向けの使い捨てシナリオを量産している自分が惨めだった。

低単価な仕事も、築50年の湿気たアパートも、冷めきったカフェオレも、半額のシールが貼られた弁当も、肥え太った醜い自分自身も。

その何もかもがゴミのように感じた。

「……今日はどう、寝よう」

逃げるように眩き、布団に潜り込んだ。

しかしシーツの冷たさが肌に触れた瞬間、心臓が跳ねた。

【スカッと系】のプロット修正を忘れていたことに気づいたのだ。

夏海は慌てて起き出し、軋む椅子に座り直す。

納期を破るわけにはいかない。

日向からは「約束を守らない奴はいらない」と言われているからだ。

ディスプレイ越しに、忌々しいプロットと向き合う。

「メイドカフェでのデートシーンは全部変えろ」という、あの高圧的な指示。

だが、何に変えればいいのか？トレンドって何だろう？

いつもなら他の人気チャンネルを漁ってヒントを得に行くのだが……今の夏海にはその
気力が残っていなかった。

ただ、ドキュメントが映し出されたモニターを、ぼーっと眺めることしかできなかった。

脳裏にはあの華やかなトレイラーと、洗練されたフォントで刻まれた「真藤エミリ」の名
前が、呪いのように何度も繰り返し再生されていた。

夏海は群馬県の出身だ。

最終学歴は高卒。

成績は決して悪くなかったが、勉強に情熱を傾けるのも面倒だったし、何より家に経済的な余裕がなかった。

夏海は大学進学という選択肢を捨て、卒業と同時に身一つで東京へ飛び出した。地元には忘れたいたい思い出しかない。

知り合いのいない場所で生活し、人生をリセットしたかった。

上京直後は日払いのアルバイトで食い繋ぎながら、正社員の道を探した。

出版社やゲーム会社が希望で、片っ端から受けてみたが、どこもあっさり落とされた。

唯一「アルバイトなら」と言ってくれたゲーム会社もあったが、提示された時給では都内の生活を賄えそうもなく、夏海は泣く泣く断らざるを得なかった。

正社員を諦めた夏海は派遣社員になった。

派遣の仕事は悪くなかった。

時給が良く、フルタイムで働けば手取りで21万円ほどになった。

……一生派遣でいいじゃん、当時の夏海はそう思ってしまった。

綺麗なオフィスで働き、一人暮らしには十分な給与を得て、余暇は趣味のアニメやゲームに没頭する。

それだけで、人生は完成出来るような気がしていた。

しかし、三十代に突入した途端、底知れぬ焦りが夏海を襲った。

肌や体に老いが見られ、若い人たちを見ていくうちに、このままじゃダメだと思うようになった。

「資格」「転職」——必死に検索を繰り返す中で見つけたのが、「シナリオ講座」だった。

6回の添削で受講料5万円と、費用は高くない。

テレビ局とも繋がっているスクールで、内部コンクールに入賞すれば、ドラマ脚本家への道も拓けるという。

自分が脚本家になれると思えなかったが、小説家に憧れたこともあったので、試しに受講してみることにした。

最初は苦勞の連続だった。

原稿用紙1枚分のストーリーを捻り出すのに、何時間も頭を抱えた。

ようやく書いたシナリオは、自分でも面白いと思えなかった。

（こんなシナリオ、馬鹿にされるに決まってる……）

しかし、切が迫っているのもあり、夏海は初めての課題を怯えながら提出した。

1カ月ほどで返却された添削を開封するのは怖かったが、お金を払っているんだからと勇気を出して見た。

ケチヨンケチヨンに否定されてると思いきや、赤いボールペンでびっしりと書き込まれているのは暖かい誉め言葉だった。

それを見た瞬間、夏海の鼻の穴は、自分でもわかるほどみるみるうちに膨らんでいった。

それ以来、課題を送ることが喜びとなった。

創作は、内面の露出だ。

時には誰にも見せたことのない、恥ずかしい思い——所謂イタいと言われるような展開や結末——を講師に晒す。

講師はどんな内容でも受け止め、良さを見出し、賞賛してくれた。

おそらく、初級講座ではそういうマニュアルになっているのだろうが、夏海は自分自身
が次々に肯定されていくことに、快感を見出していた。

無事に初級講座を終えたが、中級講座には進まなかった。

初級はお稽古ごとのノリだったが、中級からは一気にプロ養成カリキュラムになることを知ったからだ。

コンクール入賞を目指し、何十枚もの本格的な原稿を書き上げる。

(私にそんな長い物語が書けるはずがないし、ドラマ脚本家なんて一部の人しかねないんだから……)

夏海は挑戦することすらせずに、挫折した。

「えっ、1450円……!?!?」

派遣会社からの電話に、夏海は思わず素っ頓狂な声を上げた。

先月、3年間勤め上げた職場を満了で退職したばかりだった。

派遣には「同一事業所での勤務は3年まで」という厳格なルールがある。

それは最初から分かっていたので、3年で終了することに不満はない。しかし、問題が次の仕事だった。

前職の時給は1650円。当然、次も同等の条件を希望した。しかしこの3年で、派遣の相場は音を立てて崩れていたようだ。

「1600円以上の仕事はないんですか？」

「申し訳ありません。原田様のスキルでご紹介できる案件ですと、1500円も難しいかと……」

言いにくそうに言葉を濁されて、自分のスキル不足を痛感させられた。もしかしたら今後、更に時給が下がるかもしれない……。

将来の不安を実感した夏海は、副業を求めてクラウドソーシングサイトに登録した。画像や動画の仕事は出来ないのです、やるならライターだ、と夏海は考えていた。

ライターカテゴリを見ていくと、「漫画動画のシナリオライター」の募集が目に入った。

「1万字で3000円。高単価です！」

1文字0.3円で高単価と言うクライアントなんてヤバさしかないが、サイト内には0.1円案件もある魔窟なので、それに比べれば……という意味なのだろうか。

未経験で仕事を得るのは難しいと聞いていた夏海は、実績を作るためにその案件に応募することにした。

「未経験ですが、シナリオ講座を受講していました」とアピールし、応募文を送った。その日のうちにテストライティングの案内が来た。

何と、テストでも10000円の報酬があるとのこと。しかし課題は1万字のシナリオだった。

夏海はチャンスを逃すまいと、必死に食らいついた。

類似の他チャンネルを研究し、言葉を丁寧を選び、数十時間かけてシナリオを完成させた。

合否を待つ間は生きた心地がなかった。

連絡は2日後に来た。

『採用です。これからよろしくお願いします』

その一文を見た瞬間、夏海の身体はガタガタと震えた。

自分の内側から絞り出した言葉が、初めて社会に、他者に、対価を払うに値すると認められたということだからだ。

その瞬間の高揚感は今までの人生で最高のもので、これは人生の絶頂へ続いているのだと、当時の夏海は信じて疑わなかった。

……今なら分かる。

あの程度の募集、選ばれたわけでも何でもないと。

バズってる他の動画を、パクリにならないようにリライトするだけの作業なのだから。

優れたシナリオ能力なんて、不要。

並の日本語能力さえあれば誰でも通ってしまう、安い門。

しかし、夏海はセンスのないライターでは無かった。

他の応募も受けてみたらたちまち採用になり、一気に6件ものクライアントを抱えるこ

とになった。

最初のクライアントは0・3円だったが、その後は0・5円以上に絞った。おかげで初心者ライターにしては、なかなか恵まれたスタートを切ることが出来た。

派遣の仕事が終わると一目散に帰宅し、総菜パンとカップ焼きそばを片手にパソコンに向かい、深夜までキーボードを叩き続ける。

生活は過酷を極めたが、胸は充実感で満たされていた。

初めて自分のシナリオが動画化された夜のは、今も忘れられない。

予算の少ない零細漫画チャンネルの動画だった。

イラストレーターが1枚500円という薄給で描いた絵は、線画は雑で、塗りには影がなく、デッサンも狂いまくりの酷いものだった。

しかし自分が生み出したキャラクターに色が付き、形を持って動いている。声優が自分の書いたセリフに命を吹き込んでくれる。

誇らしかった。

シナリオライターになれて良かったと心から思った。

他人にとっては稚拙な動画かもしれないが、夏海にとっては、大作のアニメ映画のよう
に思えた。

今でも夏海はその動画を、時々再生する。

自分の原点を確認する為に。

夏海は着実に実績を積み上げた。

1年後にポートフォリオを作り、登録者10万人を超える中堅以上の漫画チャンネルに
次々と営業をかけた。

ほとんどのチャンネルがテストライティングの案内を寄越し、夏海は難なくパスをした。
登録者100万人規模の大手チャンネルとも契約が決まった時、夏海は「ここまで来れる
なんて！」と飛び跳ねて喜んだ。

当時の文字単価は平均2円だった。

動画系のシナリオライターとして、確実に成功を積み重ねていた。

（私は選ばれた人間なんだ！）

夏海は確信した。

かつていた低単価のデイスコードのチームチャンネルには、ライター歴が長そうなのに、0.5円の仕事を必死にこなしている者もいた。

一生浮かばれないまま泥を啜る人間もいれば、夏海のように軽やかに階段を駆け上がる人間もいる。

（才能がある人間は、こうも鮮やかに世界が変わるのね）

彼女は取り残された者たちを鼻で笑った。

書くことで生きていけると確信した夏海は、派遣の仕事を辞めた。

そして低単価のクライアントを全て切り、売れっ子ライターとして華々しい気持ちで専業ライター生活に入ったのだった。

夏海はライター用のSNSを持っている。

夏海が専業になった頃、『真藤エミリ』と出会った。

彼女が夏海をフォローしてきたのだ。